

【資料】

99中国女文字調査研究報告

遠藤 織枝

Nüshu, Women's Script, Report on '99

Endo, Orië

はじめに

本誌12 - 2号「'98中国女文字調査研究報告」以降に行った、1999年1月と4月の調査と研究の報告をする。今回明らかになったのは次の事柄である。

- (1) 昨年来体調を崩していた陽煥宜が元気になっていて、まだ書いたり歌ったりできるのがわかったこと
- (2) 何艶新が新しい歌を作ってくれたこと
- (3) その作品を通して何艶新の文字の特徴がわかったこと
- (4) 何静華が文字をたくさん知っていることがわかったこと

キーワード：陽煥宜、何艶新、何静華、陽と何艶新の筆順比較

(1) 陽煥宜の現状 (写真)

陽煥宜の家には、現地を訪れるたびに訪問し、そのつど、彼女の生い立ちや、女文字との関わりなどを聞いているので、それらを要約する。

陽は1909年江永県上江墟鎮楊家



99年4月 撮影

村生まれ、今年90歳。14歳のとき、同じ鎮の興福村の義早早という女書^{注1)}のとても上手な女性から文字を習った。

その義早早のもとに、陽は週に1回、あるいは10日に1回ぐらいの頻度で習いに通った。習うたびに400文の謝礼を払った。その金は、畑に残る落花生を拾い集めて売ったりして自分で稼いだ。

先生はまず、歌を歌って、それからその句を書いた。先生の手動きを見ながら自分も書いて覚えた。家に帰ってから練習した。歌いながら覚えた。2年ぐらい習った。姉がいたが、姉はそんな小難しいものを習うより遊んでいるほうがいいと言って習わなかった。村の同じ年ごろの娘も陽のほかは誰も習わなかった。

書けるようになると、義理の姉妹への手紙や、三朝書^{注2)}、廟に奉納する祈願文などを書いた。他人に頼まれて書いてあげたこともある。普通の手紙のときはお礼はもらわなかったが、三朝書のときは100文から300文もらった。書く内容は、頼みに来た人の家のことを聞き、占いで運が強いかわ弱いか判断して、それぞれに合わせて歌を作ってそれを書いた。

結婚後は忙しくて、女書は全く書かなかった。はじめ、同じ鎮の新宅村に嫁いだが、2年後に夫は毒蛇にかまれて死んだ。後、河淵村の何家に再婚した。8人の子どもが生まれたが、今は2人しか残っていない。夫は賭事が好きで、借金も多く、1年に半年ぐらい食べ物を買うお金がないことがあった。苦労して子どもたちを育てた。夫もなくなった今、銅山嶺農場にいる息子の家に、世話になって暮らしている。

女書は、北京の学者^{注3)}が90年ごろ、訪ねてきて書くように勧められて再び書くようになった。初めは、書いても役に立たないからと思って、気が進まなかったが、息子が紙や布、筆記具などをたくさん買ってきて勧めるので、暇なときは書くようになった。

95年には、北京女性会議に遠藤たちに北京へ招待してもらった。^{注4)}

北京はすごいところだ。天安門や毛沢東記念館を見た。毛沢東は今の皇帝様だ。

以上のような経過の後、96年と97年に訪ねた時は、元気に張りのある声でうたい、その歌の言葉を女書で書いてくれた。97年のときは、大きな扇子や、たくさんのハンカチに書いたものをみせてくれながら、自分が死んだら書ける人はいなくなるから、今のうちに書いておくのだと、その使命感を語っていた。

98年、わたしは現地へ行かず、北京で調査をした。現地から何艶新と、古い歌をたくさん知っている何静華に、北京へ来てもらってそこで調査した。現地での調査は、行くのが簡単でない上、現地政府とのやりとりで非常に煩わしいことが多いので、インフォーマントを北京に呼んで調べてはどうか、との中国人協力者の助言を受けてのことである。

そのとき、現地の土話のインフォーマントとして北京に来てもらうように頼んでいる蒲念先^{注5)}に、現地を発つ前に陽煥宜の様子をみてきてほしいと頼んでおいた。蒲念先は、銅山嶺農場の陽の息子の家に彼女を訪ねて様子を見てきてくれた。その報告では、下の息子に先立たれてとても弱っている。字はほとんど書けない。手が震えて書けない。頭もぼけてしまっている、というものであった。

高齢だから仕方がないことだ、来るべき時が来たのだと、残念に思いながらもその報告を受け入れ、ほとんど諦めてしまっていた。

だから、今回4月24日、銅山嶺農場に彼女の息子の家を訪ねるときも、書いてもらうことは無理だろうと思いこんでいて、紙も筆記用具も持っていかなかった。ただ、陽を見舞うつもりだった。ところが、息子の家に近づくと、見覚えのある陽の姿が外にあった。裏山の方へ向かって歩いている。思わず駆け寄ると、気がついてにっこり笑ってくれるではないか。元気そうで、足取りもしっかりしている。

97年以來のことを尋ねると、以下のような答えが返ってきた。

97年12月、下の息子が死んで、落ち着かなくなった。何もできなかった。何もする気が起きなくなった。

息子は、ちょっと病気をしていたが、暮れになって、ある晩、喉が詰まって息ができなくなり、横にしたら息を引き取った。

去年98年の12月には、転んで腰をやられて2か月くらい寝ていた。今、毎日歩いている。毎日なにもすることがないから、食べて寝ている。嫁が全部やってくれるから、自分では何もしなくていい。動くと、いつも息切れがするし、動悸が激しくなる。

女書は息子が亡くなってから、書いていない。何も書く気がしない。でも、書いてほしいなら、なにか書いてもいい。

この返事に勇気を得て、後日また来るから何でもいいから書いておいてほしいと頼んでその日は辞した。

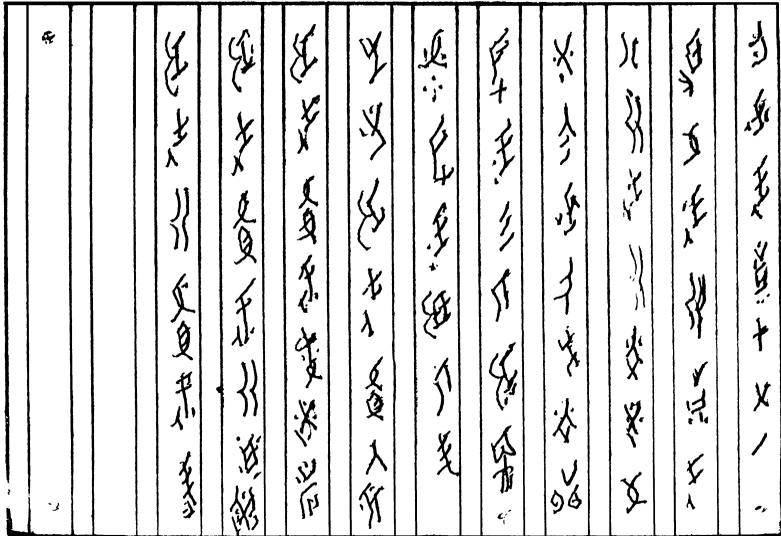
4月26日、書いておいてくれたものを受け取りに、また、陽が女書を書くところと、歌うところをビデオに撮らせてもらうために、再び、銅山嶺農場を訪ねた。

小さいノート(12cm×17cm)を、きのう書いたものだと言って見せてくれた。しっかりした字体で、震えているようには見えない。昔からみんなが歌っている結交姉妹^{注6)}の歌だという。

ビデオをとるから、新しい紙に書いてほしいと言っているいろいろな紙を出す。線がなくて書きにくいとのこと。サインペンやボールペンも太さや、濃さが気に入らない。いろいろ試して結局、きのう書いておいてくれたノートの残りのページにボールペンで、ということになる。

ペンの持ち方は、人差し指を、上にし、親指と中指でペンをはさんで、そのままペンを立てる、毛筆で巻紙に書くときのような持ち方。

小さいノートの1ページに黙って書いていく。手は震えているが、文字



資料1 陽煥宜の文字 99年4月

には全く震えは見えない。(資料 - 1)

書き終わると、それを見ながら歌う。しっかりした、張りのある声で、しかも、この種の歌の哀調を帯びた節回しを、93年に最初に会って聞いたときと変わらない調子で歌いあげる。

その歌の内容を聞くと、「18歳の娘を嫁にいかせる時の歌。金銀の絹の服に、刺繍の帯をつけ、前に獅子の刺繍があり、後ろに絹のかけものをかけてきれいにしているという意味だ」とのこと。この歌をめぐる陽煥宜との一問一答は次のとおりである。

「どうしてこの歌を書いたんですか？」

「この歌がとても好きだから。」

「どういうところが好きなんですか？」

「この娘が好きな男と夫婦になった。男が町へ出て役人になった。役人になって金持ちになって、もどってくるとき、道端にいた若い

娘を、自分の妻だと気がつかずにからかった。それを、恥辱ととった妻は自ら命を絶った、という話の歌。嫁がかわいそうで、その気持ちがよくわかるし、自分の気持ちと合うから好き。」

「もう自分では歌を作らないんですか？」

「自分で作った歌はみんな人にあげてしまった。自分の一生は悲しい一生だった。」

「昔は、結婚の時、泣きながら歌ったという哭嫁歌^{注7)}を作ったことがありますか？」

「昔は書いたけど、解放後はそういう悲しい歌はだめだったから、書けなかった。きのう書いたのは、結交姉妹の歌で、みんなが歌っていたもの。」

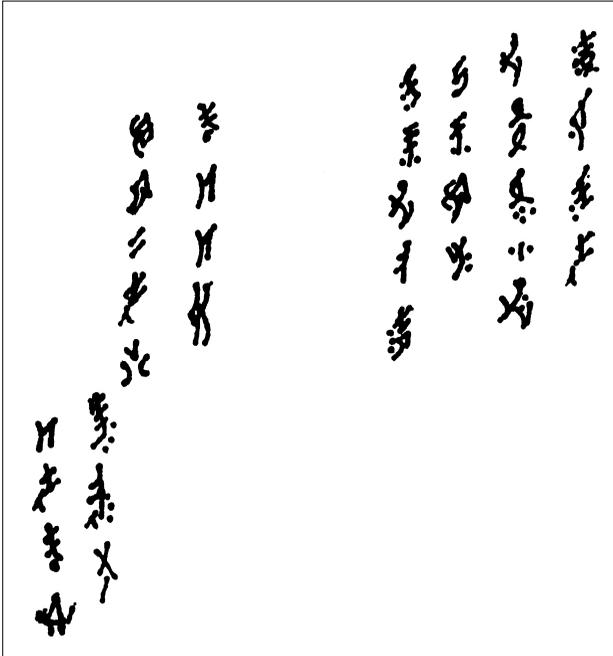
「結交姉妹は何人いたんですか？」

「4人いた。4人ともみんな同じくらい好きだった。みんな死んでしまった。」

このように、質問のポイントをきちんと押さえて答えてくれている。

その後で色紙にも書いてもらった(資料 - 2)。この色紙のことばの意味は「遠藤老師 / 好多尽孝心 / 幾往先生 / 到来好礼情 (遠藤先生は孝行な人で、たびたび来てくれて、礼儀をつくしてくれる) 一九九年^{注8)} / 四月二十六 / 陽煥宜 / 九十一歳」というものであった。

暇なとき書くのは、昔の歌で、自分の好きなものを書くだけだが、この色紙は相手や、その場の状況にに合わせて書く、いわば即興の歌を作って表現することになるので、ぼけていたらできない。だれにも聞かずに遠藤の名前を書いたことから、記憶力も衰えているようにはみえなかった。昨年8月の蒲念先の報告で、一時諦めていたが、そのしっかりした書き方や歌いぶりに、自分の諦めの早すぎたことを反省し、そのうれしい誤算に心から安堵した。



資料2 陽煥宜が書いた色紙

(2) 何艶新の文字

何艶新は、94年の8月以来、少女のころ習った女書の記憶を取り戻してきていて、自分の思いを女書で書けるようになってきている。97年には日本へ来て^{注9)}、女書の生の姿を日本の公衆の前で初めて披露してくれた。その後、長く患っていた夫が亡くなり、農作業に追われている。高校生の息子と中学生の娘の、養育の責任を一身に担い、女書を書くための時間的、精神的な余裕はないと本人は言っている。

彼女がおそらく女書の最後の伝承者と思われるので、わたしは彼女の文字の全容を記録したリストを作りたいと考えている。昨年までに、彼女が

今までにいろいろな作品、手紙、自伝の中で使ってきた文字をすべて集めて、その中の異なる文字を抜き出した資料を作り、今回それを渡して、その文字を彼女の手で書き直してもらった。その音韻は共同研究者の中国社会科学院の黄雪貞が記録した。これで、それぞれの文字の音韻と使い方を示した文字リストの基礎資料ができたことになる。

(3) 何艶新の新作

さらに、何艶新は、何か最近の思いをこめた歌をかいてほしいとのわたしの頼みを聞き入れて、歌を作り、女書で書いてくれた。(資料 - 3 - ①、②、③、④) 陽の書いてくれたのと同じ大きさの、12cm × 17cmの小さいノートで、9ページ、104句、計728文字の詩である。その詩を周碩沂翻字、陳力衛^{注10)}・遠藤共訳で紹介する。

空房に独り思いをはせる	女書が広く伝わるようにと
私は貧しい瑶族の娘	家を出て物見遊山に出ることもなく
たまたま女書の縁に恵まれ	飛行機に乗って東京に行く
飛行機一飛び千里を飛んで	両の翼で大洋を渡る
(中略)	
女書のシンボに参加して	心の底から喜び味わう
人々わたしを熱意で迎え	満座の人々女書を想う
わたしはあまりに物知らず	あふれる聴衆にあわてるばかり
目くらみ何も見えなくて	ハンカチ出して顔覆う
うつむいたまま声出して唱い	筆を振るって女書をしたたむ
(中略)	
東京にきて1週間	あちこち見学風光をめで
雲つくビルに目を見はり	ネオンの光心を照らす
珍味美酒初物ばかり	東京の日々は瞬時にすぎて
列車千里大阪へ向かう	わたしは大海原を飛ぶトンボ

車の列は這う蟻のごと	どこを向いても田圃も見えず
(中略)	
日本の風流尽きないが	ここで話を家に移す
21日家に帰り着き	右足玄關またいで部屋に入る
居間に一息つく間もなく	夫叫んで呼び続ける
声聞きながら荷物を解いて	土産の菓子手に病室に入る
病気いかがと夫に問うと	妻よわたしの言葉を聞け
お前は日本でいい思い	わたしの苦しみわかるまい
毎晩毎晩寝られずに	お前の帰りを待ちわびた
やっと戻ったお前のその目で	夫の死ぬのを見届けよ
夫の最期の言葉を聞いて	涙あふれて断腸の思い
21日わたしが帰り	22日に夫は死んだ
今や夫は黄泉路をたどり	残った母子はほんとに哀れ
主のない家がらんと広く	なにかと相談する人もなし
わたしの前世の行い悪く	妻は西行き夫は東
(中略)	
わたしの力が足りなくて	子どもに勉強の金やれず
あれこれ思って心騒ぐ	わかってくれる人だれもなく
前に影する大樹なく	後ろに頼れる山もなし
二親揃えば子どもも幸せ	父親なければ子はみじめ
二親揃って子が合格すれば	酒盛り開いて大にぎわい
我が子も大学挑んだが	爆竹で祝う大学に入れず
父親この世にいないとき	子どもの学費をどう工面
母は江永県に連れ添って	我が子見送り涙あふれる
息子わたしに優しい言葉	心焦らず体をいとい
母の体は何より大事	故郷忘れず勉強に専念
学校に着いたら手紙を書いて	様子知らせて安心させる
話し話して話は尽きず	命のかぎり哀れさ続く

日本についての印象がトンボや蟻の比喻を巧みに用いて生き生きと描かれ、また、夫との最後のやりとりも極めて冷静に描写している。夫なき後の不如意さを「前に影を作る大樹もなく 後ろにたよりにできる山もない」と、比喻と対句を有効に使って表現している。進学する息子を見送ったときの、息子の言葉も胸を打つ。

以下に、この作品に用いられた文字と、彼女の文字を書くところを撮ったビデオとから、彼女の文字の特徴を考えてみる。(資料6)

(資料3 - ①)のA, B, (資料3 - ②)のE, Fなどは、漢字とほとんど変わらない。ここに、女文字のルーツが漢字であることがよく現れている。しかし、これらは何艶新だけの特徴ではなく、従来 of 女性たちが使っていたものである。ところが、(資料3 - ①)のC, D, (資料3 - ②)のG (資料3 - ③)のH、(資料3 - ④)のIは、従来 of 女性の文字の書いた文字のリストには現れない文字で、つまり、何艶新に独特の文字である。Cは、「表す」意味のことばを書こうとして、漢字の「表」をくずして、イ(にんべん)をつけたのではないかと思われる文字である。「表」は現地の音では / piu³⁵ / で、この音を表す女書は「

Dは、「賓館(ホテル)」の「賓」を書いたのであるが、Dの文字は今までどの研究者の調査にも現れていない文字である。宮哲兵らの文字リスト^{注11)}では、「賓」の音は / pai⁴⁴ / で、その音の文字は「

(資料3 - ②)のGは「(歌を)吟ずる」意で、まさに漢字の「吟」を用いている。漢字の原型をとよくとどめている。「吟」の音は / nie⁴² / で、その文字は「

また、(資料3 - ④)のIの「砲」も漢字そのままの文字を用いているが、この字の現地音は / piou²¹ / で「

これらはいずれも、他の伝承者の文字、他の原資料には現れてこない文字である。このことは、何が自分の書こうとする言葉の女文字を知らないか、忘れたかした場合、臨時に創ってしまうことがあるということであろう。これは、中学校までいって、漢字の教育を受けた何だからできることであって、漢字の教育を受けていない陽には、臨時に創ることはできなかったであろう。

何の女文字が漢字の影響を強く受けているのは、筆順についても言える。この、湖南省の女文字は字形として、右上から左下へ傾斜する菱形が基本である。書き方としても、右上から、左下に筆を滑らせるのが伝統的な書き方である。

今回、何艶新の書き方を知るために、彼女の書いているところをビデオに撮った。同様に、陽煥宜の書くところもビデオに収めた。同一文字で、2人の筆順を比べてみる。2人の筆順を数字で、線の流れの方向を矢印で示す。(資料4 - ①、4 - ②)

Jの字は、陽は、第1画の長い方の線を右上からおろし、第2画の短い線は左上から斜めにおろす。何は、漢字と同じく、左上からの短い方の線を第1画とし、第2画の長い線を右上からおろしている。

第3画も、陽は、右側の曲線であるが、何の第3画は左側で、これも漢字の筆順と一致する。

次に、Kについてみる。陽の第1画から第3画までは右上から左下に流れている。何のは第1画は右上からの斜め下への線で、女文字式だが、第2画は垂直線で陽のと順序が違う。第3画、第4画は右下から斜め上へ上がる線で、漢字式である。第6画も陽は右から左へ引いているが、何は左から右へ漢字と同じ方向の引き方をしている。

何艶新は祖母に教わった、右上から斜め下への女文字の書き方と、学校で習って身につけた、横の線を左から右へ引く漢字の線の原則との両方を用いており、しかも漢字式の書きの方が優勢である。

以上のように、何の女文字の字形と、書き方には、漢字の影響が大きい



資料4 - ① 陽煥宜の筆順



資料4 - ② 何艶新の筆順

ことがわかる。中国の解放前、学校教育を受ける機会がない女性たちが、自分たちで創った女文字にはそれぞれ独特の形があり、書き方があった。解放後学校で学ぶことのできた何艶新の世代では、漢字の書きの方が大切であっただろうし、その方が新しく身に付いたものとして強く残っていることは当然予想される。何のような漢字を取り入れて書く女文字は、この文字が最後の局面に近づいていることを示す証左とも言えよう。

(4) 何静華の文字

何静華は1940年生まれ。女文字の伝わらない允山鎮の出身だが、何静華の女文字との出会いは3度あった。娘のころ、女文字で歌を書いたノートを見て、その文字が美しいので、その紙の上に薄い紙をおいて、何度も何度も練習した。だから、文字の形はわかったが、自分の歌を作ってこの文字で書くようなことはできなかった。

こうした文字の習い方は、今までの伝承者の習い方と全く異なる。従来の伝承者は、娘時代に、結交姉妹とか、母親、祖母など、よく書ける人に、時間をかけて教わったと言っている。そして、マスターしたあとは、自分で思いを歌にし、それを書いていた。また、人に頼まれて、その人に合った言葉で三朝書などを書いたりした。

何静華は、自分の趣味として、文字の形を見てなぞりながら、自分で覚えた。彼女の娘のころは、中国の解放後で、日常の中でこの文字を書く人はもうほとんどいなかった。教わりたかったとしても、教える人はもういなかった。

何静華は14歳のとき小学校に入り^{注12)}、漢字を習う。また、そのころは、村でも、古いものは封建思想に通じるとして非難されるという時期だったので、女文字を書くことはなかった。

80年の終わりころ、この地方に女性だけの文字があるといって、テレビで女文字が紹介された。2度目の出会いである。それを見て、静華は、むかし、自分たちが長脚文字といていた、あの、娘のとき練習した文字が「女書」という名で呼ばれることを知った。テレビで、高銀仙^{注13)}や、義年華^{注14)}が文字を書くのを見て、彼女たちのように女書で自分の気持ちが書けたらいいと思った。

90年代のはじめごろ、高銀仙も義年華もなくなると聞いて、もう教わることもできなくなると、淋しい気がした。

95年、北京で開かれた世界女性会議に合わせて制作された、この地方の文化を紹介するテレビ番組に出演したことがある。その番組では歌堂^{注15)}のことなどが紹介され、自分も哭嫁歌などを歌った。そのとき、趙麗明に女書ができるかと聞かれた。そのころ、200字ぐらいいは知っていたと思うが、できないと答えた。その場で書けと言われて書けないと悪いから。

その後、蒲念先が、日本人の研究者が昔の女性達の歌を歌える人を探している、というので蒲と一緒に日本人の泊っている政府招待所へ行った。歌はテレビにもでたことがあり、古い歌を歌うのが大好きだ。

97年9月、招待所で、日本からの研究者に頼まれて歌った。それを、何艶新が女書で書き取っていた。艶新は文字は知っているが、歌はあまり知らない。何艶新が書くのを見たのがこの女文字との3度目の出会いである。何の文字で間違っていると思った字があった。また、研究者に女書を書けるかときかれたが、書けないと答えた。

研究者たちが、帰ったあと、彼らが残していった女書を書いた紙を見て練習した。蒲棟万^{注16)}が、女書を勉強するなら、県誌^{注17)}を学ぶといいと教えてくれた。

県誌は、女書と漢字が並べてあるので、意味はわかる。使いたいことばを漢字で探して、そのとなりに記された女書を見て、それらをつなぎあわせれば歌も作れる。義年華の作った悲しい歌の中の、ことばを入れ替えれば、自分が歌おうとする、死んだ息子についての悲しい気持ちを表すことができ、息子を想う歌に作り替えることができる。音は土話がわかるから、声に出してうたうこともできる。こうして作った歌を周碩沂のところへ持って行って指導してもらった。周は最初、とても驚いた。そして、だいたい合っていると言い、間違っているところを直してくれた。

何静華の女文字との接触の歴史と、その回復のプロセスは以上のものであった。何静華に書いてもらった文字のリストの一部を示す(資料 - 5)。

数はまだ全体は掴んでいないが、何艶新より多く知っているようだ。静

華は、文字のリストをもとに練習しているから、書ける文字数は今後も増えるだろう。何艶新と違って生活にゆとりがあり、練習する時間もあるので、その可能性は大きい。先輩女性を介する従来の学び方と異なり、あくまでも自学自習による学習の成果ということになる。60歳近くなっても、1年ぐらいかければ、学習し、習得できる例として、貴重な存在でもある。

- 注1) この地方で、この地の女性文字を「女書 - nüshu」と呼ぶ。以下現地の人の話を引用する際はこの語を使う。
- 注2) 嫁ぐ娘に、結婚式の3日目に贈る冊子。娘との別れの悲しみや、結婚後の幸せを願う歌などを女文字で書いた。
- 注3) 清華大学教授趙麗明のこと。
- 注4) 1995年9月、北京で開かれた世界女性会議で遠藤が中心になり、中国女文字と女性文化に関するワークショップを開いた。そのとき陽を北京へ招いた。
- 注5) 江永県在住。地元の方言がよくわかり、歌のことはよく知っていて、我々の調査に協力してくれている。
- 注6) 血縁のない少女たち、女性たちが義理の姉妹関係を結ぶこと。
- 注7) 結婚式の前の3日間、嫁ぐ娘や、他の女性たちが嫁ぐ娘との別れを悲しんで歌う歌。
- 注8) 一九九九年と書こうとして、九の字を1字書き忘れた。
- 注9) 遠藤らが、1997年11月16日に東京で、18日に大阪で開いた、シンポジウム「中国女文字と女性文化」に招聘した。



資料5 何静華の文字

注10) 目白学園短期大学専任講師。

注11) 宮哲兵編「女書 - 世界唯一的女性文字」(台湾婦女新知基金会1991年)

注12) 1949年の中国解放後、農村でも学校教育が受けられるようになったが、学齢通りに全員が教育の場についたわけではなかった。

注13) 女文字の存在が世間に知られるようになった80年代に、伝承者として多くの女書作品を残した。1990没。

注14) 高銀仙と同じく、80年代の女書研究に貢献した伝承者。1991年没。

注15) 当地の、古くから伝わる結婚式の行事の一つ。娘たちが集まって3日間さまざまな歌を歌った

注16) 江永県在住の元中学教師。地元の方言のインフォーマントとして我々の調査に協力してくれている

注17) 江永県の県誌。地勢、気候人口、産業、教育など、県のさまざまな実況を伝えている。この県の特筆すべき文化として、女書に45ページをさき、文字のリストも提示しているが、その文字のリスト作成については、その作成者の名前もあげられず、従来の研究成果も取り入れられず、不正確な箇所も多くて、文字の実態を反映しているものではない。湖南省江永県誌編纂委員会編 1995年刊。

参考文献

宮哲兵 (1986) 「婦女文字和瑶族千家洞」中国展望出版社

宮哲兵・趙麗明 (1990) 「女書——個驚人的發現」

趙麗明編 (1992) 「中国女書集成」清華大学出版社

史金波・趙麗明他編 (1995) [奇特的女書] 北京語言学院出版社

楊仁里・周碩沂他編 (1995) 「永明女書」岳麓書社

遠藤織枝 (1996) 「中国の女文字 - 伝承する中国女性」(三一書房)

全 (1996) 「96春 中国女文字現地調査報告」文教大学文学部紀要第10 - 1号

全 (1997) 「96夏、97春中国女文字調査報告」全第11 - 1号

全 (1998) 「98中国女文字調査研究報告」全第12 - 2号

本研究は平成11年度科学研究費補助金「国際学術研究」によるものである。

(文中敬称省略)